

大学におけるケアマネジメント教育の効果に関する研究

- 卒業生への追跡調査から -

日本福祉大学 二本柳 覚 (6983)

野中 猛 (日本福祉大学・5098)

〔キーワード〕ケアマネジメント演習・ケアマネジメント作業指標・知的理解

1. 研究目的

A大学においては、2002年度より3年次開講科目として、2010年度まで、前期に「ケアマネジメント論」を、後期に「ケアマネジメント演習」をそれぞれ開講している。ケアマネジメント演習の受講に際しては、原則前期にケアマネジメント論を受講していることとし、多くの学生が社会福祉士の実習を終えた後期にケアマネジメント演習を配置することによって、より学びを深くすることができるようにしている。

2006年、上野らによって、ケアマネジメント演習の受講による学生の知的理解は、演習開始前と開始後で明らかな上昇が認められ、上昇した領域は教授側の強調点と一定の関係があったことが明らかとなった。また、前年の本学会発表において、2008年度までの調査結果から、ケアマネジメント論を通じて学んだ知識を、演習によってより深く理解することが出来ていたことものの、演習で取り組めない部分については理解が進まなかったことを報告した。

本研究は、上記研究の継続研究として、大学卒業後、ケアマネジメント演習で学んだことがどのように活かされているか、その効果や知識の持続性、またそれを受けてケアマネジメント教育の課題を検証するものである。

2. 研究の視点および方法

本研究では、A大学における2005年度から2008年度までのケアマネジメント演習を受講した卒業生を対象とした。対象の選定には、調査者及び調査協力者の把握する範囲で対象者を選定し、調査依頼を行った。調査は、各卒業生に対するインタビュー調査、及びインタビュー時点でのケアマネジメントについての知識理解の確認を行った。

ケアマネジメントの知識理解を図るために、インタビュー調査時において、野中が開発したケアマネジメント作業指標 (Work Index 以下「WI」とする) を用いて、対象者自身で質問項目に答える形で自己評価を行った。

WIは、知的理解と実行程度について評価するものであるが、今回の調査においては対象が大学生となるため、知識レベルに付いて回答を設けた。項目はそれぞれ順に、「何のことも全くわからない」「おおまかにわかったが、一部の理解が危うい」「内容は何とか理解できた」「内容は理解できたが、人に説明するには自信がない」「すでにほぼ完全に理解し

ているし、人にも説明できる」とし、順に1-5の点数を配置した5段階評価で回答を求めた。WIの検討には、インタビュー時に実施したWIの結果と、その学生が学生時代に受けたWIの結果（演習終了時）の2地点のデータから検証を行った。

3. 倫理的配慮

本調査の実施及びデータ分析においては、対象者の人権に十分配慮し、データは統計的に処理をした。また調査対象者に対しては、本調査の趣旨とともに、調査対象者個人の特定をすることは出来ないことを口頭で説明し、いつでも実施を止めることができることを伝えた上で、実施に対する同意を求めた。

4. 研究結果

調査対象の選定の結果、11名を調査対象者とした。対象となった11名はそれぞれ卒業年度が2008年度4名、2006年度1名、2004年度6名である。職種はPSW3名、MSW4名、ケアワーカー4名であった。

インタビュー時のWI結果は、全体の平均としては、3.14であり、11名の在学時最終回の得点平均3.36に比べ0.23減少、増加率は-14%と減少に転じている。これは7年間の最終回における全体平均である3.27に比べても低いものであった。個別では1名が増加率14%と最も高く、次いで増加率13%となっている。逆に、11名中7名が在学時に比べ得点平均が低く、特に最も低い者は、増加率が-43%であった。この状況は、現場で実際に必要となる知識・能力と、ケアマネジメント知識の差から生じるものであると考えられる。

職種別でみた場合、医療機関で勤務しているMSWが4名中3名、医療機関に勤務しているPSWも含めれば5名中4名が、在学中に比べ得点の増加がみられた。しかし、他の職種での得点増加は、ケアワーカーは4名中1名、施設勤務のPSWに関しては2名中1名であった。

続いてSPSS17.0を用いて統計処理を行った。Wilcoxonの符号付き順位和検定を行った結果、5%有意水準において、「機関からの紹介」「関係者からの情報収集」「教育・研修」に、在学時と追跡時の間に有意差がみられた。その他の結果は発表の際に報告する。

インタビュー調査では、演習で行われた内容については思い出せないという者が多い反面、「ケアマネジメントを十分に活用できているとは言い難いが、実際に現場に出た際に、周りの人に比べて幅の広い考え方が出来ているような気がする」など、演習形式で周囲と考えながら行うことが、現場に出てからも生きてると答えたものが多く見えた。また、インテーク、アセスメントについては考えるものの、そこから先を見ることが少なく、なかなか出口まで沿って考えることが少ない、という意見も聞くことができた。これらから本演習教育が、必ずしも現場に有用な能力を身につけさせることが出来る訳ではないものの、現場に必要な思考力向上に効果を及ぼしていると考えられた。